

た様子である。

ついでに信州南佐久郡、田口村、荒船火山兜岩、陣ヶ平、の千曲洪積層の化石植物群は八木貞助氏により地學雜誌、第四十三卷五〇七號に記されてあるのを拜見するに、本植物群は現今の地層の位置と餘り異らざる高地に生育せしもの、由にて、本植物群は當時今よりも約二又は三度低溫なりし時代のものと結論されてある。

然し本植物群を見ると、其當時は今より二、三度低溫なりしと考へられず、只今と同一であつたと思ふ、尤も八木氏はカクレミノやイ、ギリ(?)の存在を重要視されての事ならんが、現今此地方にカクレミノの如き要素の存在する筈がなく何かの誤であらう、若し又萬一あつたとて、それは全く別の意味の見方をすべきである、イ、ギリ(?)はイ、ギリではなくてヤマグハ (*Morus bombycis* KOIDZ.) であると思ふ。

又本化石群は鹽原化石群よりも少々低溫の地にあつたと云はれるが、予は本化石群は丁度今の鹽原地方とも異つた氣溫の下にありしと考へられぬ、鹽原化石群は今の鹽原よりは低溫の處にありしと考へるが、本千曲洪積層の化石群は今の鹽原地方と同一氣候の處にあり得るものである。

それで本信州化石群は鹽原化石群の時代よりは餘程温くなつた時代のものであると思ふ。

### ときはまんさく屬 (*Loropetalum* R. BR)

小 泉 源 一

金縷梅科のトキハマンスク屬には三種ありて、其分布の状は全くトサミヅキ屬 (*Corylopsis* S. & Z.) と其軌を一にせり、日本植物學雜誌第四十六卷四三五頁にはイスノキ屬 (*Distylium* S. & Z.) も亦是等と同一分布をなすやうに記してあるが是は誤である、本屬は予の支那中部要素と稱する植物地理上の分子であつて、三種の中最も廣く分布するは、トキハマンスク (一名ケイノキ) (*Loropetalum Chinense* OLIVER) で東は西南日本の外帶から支那中部南部より印度 Khasia 山地に至り、*Loropetalum subcordatum* OLIVER は廣東地方に分布し、他の第三種は 1930年董爽秋氏印度 Khasia 山地産のものを發見し *Loropetalum indicum* TONG と云へり。

### コバメグサ屬の新種

小 泉 源 一

四國、伊豫國、赤石山の山腹にはツガザクラ (*Phyllodoce nipponica* MAKINO) と云ふ高山植物が、一ぱいに生へてゐるが、其處は暖帶林の終り、シロモジ (*Benzoin*